

F. Donald Logan:
Runaway Religious in England, c.1240-1540.

Cambridge Studies in Medieval Life and Thought, Fourth series.
Cambridge University Press, 1996. Pp. xix + 301. ISBN 0-521-47502-3 (hc).

馬 場 幸 栄

「中世の修道士や修道女が、もし修道院から逃げ出したら？」キリスト教史や西洋中世史のクラスでひょいと投げかけられそうな質問だが、この素朴な疑問に答えることは、思いのほか難しい。多くの中世史研究者たちさえも、長年この問題に言及することを避けてきたほどである。だがしかし、修道院から逃げ出した修道士や修道女は、確実に存在した。そこで、もし、あなたがこの問題についての答えを知りたいと思われるなら、F. ドナルド・ローガン著『*Runaway Religious in England, c. 1240-1540*』を一読されることをおすすめする。本書は、修道服を脱ぎ捨てて修道院の壁の外へと逃げていった中世の人々についてまとめた最初の研究書であり、また、修道離反者の問題を通して中世社会の諸相に対する新しい視点を私たちに示してくれる一冊である。

修道離反者の研究は、本書のほかにも既にいくつか発表されている。1981年には、C. ハーパー=ビルが、中世イングランドの修道離反者についてまとめた優れた論文を¹⁾、1990年には、L. マヤリが、5世紀から16世紀のヨーロッパ全体についてまとめた論文を発表している²⁾。ローガンの著作は、同じイングランドを研究対象としているせいもあって、一見したところハーパー=ビルの焼き直しにすぎないような印象を与えるかもしれない。けれども、修道離反者についての理解を深めたいと思われるなら、本書は非常に有益である。なぜなら、この本には、他の論文にはない魅力が多数含まれているからである。

本書の第一の魅力は、アポスタタ *apostata* の定義が明確化されている点である。アポスタタという言葉は、アポスタシア *apostasia* の罪を犯した人間を指すラテン語であるが、そもそもこのアポスタシアには、「背教」ないし「棄教」を意味するアポスタシア・ア・フィデ *apostasia a fide* (信仰からの離反) と、「修道離反」を意味するアポスタシア・ア・レリギオネ *apostasia a religione* (修道生活からの離反) の二通りの意味があったのだと、著者は説明する。修道離反とはキリスト教の信仰を守りつつも修道院、修道会、修道生活から離背することであるから、修道離反者としてのアポスタタは、キリスト教の信仰を棄てた者としてのアポスタタから明白に区別されなくてはならない。本書が扱っているのは、もちろん、修道離反者としてのアポスタタのほうである。ちなみに、*apostata* というラテン語から派生した *apostate* という英語がこの本の題名に用いられていないのは、現代英語の *apostate* という言葉には「背教者」の意味合いが強いため、題名から誤った印象を読者に与えたくないという著者の配慮にもとづくものである。私たちは二種類のアポスタタを混同しないように注意しなくてはならない、とローガンはくりかえし強調する。またさらに、修道離反者としてのアポスタタを、聖ベネディクトゥスが弾劾した遍歴修道士 *gyrovagus* と本質的に異なるものとして明確に区別していることも、ローガンの著作がハーパー=ビルらの論文と一線を画している点と言えよう。

本書の第二の魅力は、掲げられている実例の多さである。ローガンは年代を特定しうる史料の中から、約1,100名ものアポスタタたちを探し出した。本文は、初めから終わりまで、その実例で埋め尽くされている。さらに巻末には、84頁にもわたるアポスタタたちのリストが、修道会別にまとめて掲載されている。もちろん、本書に登場する人物たちは、実際のアポスタタたちのうちのほんの一握りにすぎず、その正確な数や本当の逃亡理由などは知る由もない。だがローガンは、読者を数多くの実例に触れさせることによって、アポスタタたちを単なる過去の遺物としてではなく、私たち同様にさまざまな悩みや欲望を抱えた人間として提示することに成功している。

また興味深いのは、著者が修道誓願と結婚契約との間に共通点を見いだしていることである。修道院に入る資格を有する年齢は、結婚の資格

を有する年齢と同じだった。すなわち、女子は12歳、男子は14歳になると、修道院に入ることができた。修道院に入ってから1年間は修練期間がもうけられたので、誓願を立てて正式に修道者になることができたのは、女子で13歳以上、男子で15歳以上だった。もっとも実際には、規定よりも若い年齢で、そのうえ親や保護者の許可もなしに修道院に入れられたり、誓願を立てさせられたり、というケースもあったようだ。本来、清貧、貞潔、従順の誓願は修道志願者の自発的な意志にもとづいてなされるべきものだが、中世においては結婚と同じく、本人の意志よりも親や周囲からのプレッシャーによってなされたケースも決して少なくなかったであろうとローガンは見ている。アポスタタとして扱われた人物が、資格年齢に満たないうちに誓願を立てたとか、誓願が不本意なものであったという理由をもちだして、自分は正式な修道者でなかったのだからアポスタタでありえないと反論したという記録が、確かに残っている。

アポスタタをめぐる問題が、きわめて即物的な事情と結びついていた例が少なくないことも、ローガンは指摘している。相続権をめぐる親族間の争いは、そのひとつである。清貧の誓願は個人的所有物の放棄を公的に宣言する行為であり、誓願を立てた時点でその人物の相続権は消失した。また、たとえ律誓者が修道院を立ち去って俗人として生活するアポスタタとなっても、相続権が復活することはなかった。そのため、遺産を独り占めしようと企む貪欲な親族が、邪魔な身内をアポスタタとして告発することによって、その相続権を剥奪しようとする事件も起こったという。さらにまた、まったく驚くべき話であるが、修道院内において、大修道院長の座を主張し合う二人の人物が互いをアポスタタとして告発し合ったという事件も記録に残っている。

けれども、こうした即物的な事情が存在した一方で、アポスタタに対する教会側の対応が「許し」というキリスト教的信念に基づくものであったという事実を指摘することも、著者は忘れてはいない。グレゴリウス9世の『教令集』*Decretales* (1234) は、修道院にはアポスタタを探し出して再び受け入れる義務がある、と声明している。アポスタタを出した修道院の監督者たちのなかには、問題を起こした修道者の帰還を手放しで喜ばなかった者もいたはずであるが、それでも修道院は迷える仔羊た

ちの魂の救済を手助けするために、(しぶしぶながらであったとしても) アポスタタたちを許し、再び修道院のなかに迎え入れていた。1298年にボニファティウス8世は、アポスタタを全員破門に処すと発表したのが、この厳罰とでも、アポスタタたちをキリスト教世界から切り離すために設けられたものではなく、彼らの離反を防止したり改悛を促したりする目的で設けられたのであったと、ローガンは見ている。とは言うものの、修道院に帰ってきた逃亡者たちを待ち受けていたのは、放蕩息子の帰還を祝う大宴会ではなく、「贖罪」の日々であった。その贖罪の厳しさに耐えきれず、再び逃亡を繰り返す者さえいたという。

修道会は、ときには世俗権力の協力さえ求めて、執拗にアポスタタの追跡を行った。しかし、追跡の手をのがれて逃げ切ったアポスタタたちは、いったいその後どのような生活を送ったのだろうか。この問題は、おそらく読者のもっとも気になる点のひとつだろう。そして、この疑問に対する答えを本書のなかには見いだせないことがわかったとき、読者はがっかりするであろう。けれどもそれは、身分を隠し、名前さえも変えてひっそりと暮らしたであろうアポスタタたちに関する史料が残されていないためであって、私たちはこの点で著者を責めることはできない。

分析を行うために十分な史料が現存していないという理由で、本書の主要な研究範囲は1240年代以降に限定されているが、著者は11世紀後半に起こったと伝えられている次のような面白い話についても言及している。ある晩、カンタベリーの大修道士が闇に紛れて修道院から逃げ出し、聖ダンスタンの墓前で許しを乞うた。祈りを終えて立ち去ろうとすると、険しい顔をした修道士が突如現れ、行く手に立ちふさがった。険しい顔の修道士は、じつは聖ダンスタンその人であった。聖ダンスタンは言った、「許しは与えぬ、お前はここにとどまり、ここで死ぬのだ」と。この亡霊譚は『聖ダンスタン伝』*Vita S. Dunstani*の一部だそうである。アポスタタ研究は、中世文学の研究者にも有益な情報を提供してくれそうだ。

付録を除けば、本文は180頁足らずである。構成も分かりやすく、文章も平明かつ丁寧である。中世ヨーロッパやキリスト教に関心のある読者は、この本を通じて中世キリスト教世界の新たな側面を発見されることであろう。また、現代日本の宗教問題に関心のある読者は、この本で

言及されている多数の事例のなかに、いま私たちが直面しているさまざまな問題との共通点を見出すことであろう。

[注]

- 1) Christopher Harper-Bill, Monastic Apostasy in late Medieval England, *The Journal of Ecclesiastical History*, Vol.32, No.1, January 1981. pp.1-18.
- 2) Laurent Mayali, Du vagabondage à l'apostasie. Le moine fugitif dans la société médiévale, *Religiöse Devianz*, 1990. pp.121-142.